

令和 7 年 7 月 1 8 日

令和 6 年度 特別の教育課程の実施状況等について

滋賀県		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
米原市立伊吹小学校	米原市教育委員会	公立

1. 学校における特別の教育課程の編成の方針等に関する情報

学 校 名	特別の教育課程の編成の方針等の 公表 URL
米原市立伊吹小学校	英語特例校実施状況 - 米原市立伊吹小学校 (edumap.jp)

※必要に応じて行を追加すること。

2. 学校における自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学 校 名	自己評価結果の公表 URL	学校関係者評価結果の公表 URL
米原市立伊吹小学校	英語特例校実施状況 - 米原市立伊吹小学校 (edumap.jp)	英語特例校実施状況 - 米原市立伊吹小学校 (edumap.jp)

※必要に応じて行を追加すること。

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- 計画通り実施できている
- 一部、計画通り実施できていない
- ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

※(1)で「一部、計画通り実施できていない」又は「ほとんど計画通り実施できていない」を選択した場合は、必ず記載する。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- 実施している
- 実施していない

<特記事項>

3. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している目標との関係

本校は田舎の小規模校であり、地域の中で外国の方と接したり交流したりする機会にはあまり恵まれていない。子どもたちは、「素直で真面目であるが、人間関係が固定化しており、他者との関わりが深い反面、互いに切磋琢磨する意欲に乏しい」ことや、「積極的に人と関わったり、人間関係を広げたりすることを苦手とする子が多い」という実態がある。そこで、本特例を通して、子どもたちが自信をもって積極的に人と関わる力を育成したいと考え、取り組みを進めてきた。

本特例により毎週定期的に英語を学習する機会があることや、その折にM I Cのネイティブな発音を聞くことは、本校の児童にとって大変効果的である。児童たちにとって、外国の方と接したり、英語の発音を聞いたりすることが、日常的なこととなるからである。入学したばかりの1年生児童にとっても、それが自然なこととなってきている。M I Cの勤務日には英語学習の前後や休み時間等にも児童とのふれあいの様子が見受けられ、本校教職員の一員としての存在感を有している。

また、言葉の学習と併せて、外国の文化や習慣を学ぶことで、相手と分かり合い、人間関係を広げていく力を高めることにもつながると考えており、国際理解や道徳的な学習への波及も期待している。

(2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

生涯にわたって生き抜くための力として、人や事物に積極的に関わったり、自己を正しく主張できたりする等の能力は重要なスキルの一つである。特に、今後のグローバルな時代を生きる子どもたちにとっては、世界の人々とコミュニケーションを図るためのツールとして、英語に興味を持ち、理解を深めていくことが必要である。

本校の学校教育目標である「いのち ふれあい きづき 学び高めるいぶきっ子」では、英語教育を「きづき」の中の「言語活動の充実」の中に位置づけている。言葉の壁を越え、自信をもって世界の人たちとコミュニケーションをとれるようにするために、英語教育の充実は本校にとって重要である。人口が少なく、人と関わる環境や範囲も狭い本校の子どもたちが、やがて外国の人たちとも自信をもって関わり、付き合っていくための「きづき」の力として英語を身につけてほしいと願っている。

児童たちは、年々英語に親しむ機会が増えていくことで、英語を学習することに対する抵抗感は小さくなっている。今後、さらにコミュニケーション能力の育成に発展していくよう、授業改善を進めていきたい。また、米原市教育委員会が開催する「イングリッシュオラトリカルパフォーマンスミート」へ4名の児童の参加があり、今後も積極的に推奨していきたい。

4. 課題の改善のための取組の方向性

一つ目に、教師の指導力向上を図っていくことが課題である。毎回の授業が、児童たちにとって楽しく効果的なものとなるよう、絶えず改善を図ることが大切である。この改善のためには、教職員の研修機会の保証、教材の発掘、I C T機器の活用などがあげられる。指導者一人ひとりの英語力を高めることが最も有効な改善策であるが、M I Cとの連携の中で指導者の英語力を補えるような教材を発掘し、I C T機器を利活用することで、授業の充実を図っていくことも必要である。米原市では令和2年度末に配置された一人一台タブレットの有効な活用を今後も進めていく。

二つ目に、小学校における英語科の効果的な評価の在り方が課題である。実践を重ねながら目指す児童像やその具体的な姿を話し合ってきた。評価の方法や表現についても検討を重ねている。今後もさらに児童の発達段階に応じた具体的な姿を検証していくなどして、指導と一体となった効果的な評価の在り方を追求していく。

三つ目に、家庭や地域への情報提供の課題がある。学校がどのような目標や願いをもち、児童たちがどのような学習を行っているのか、家庭や地域の理解を得ることは大切である。英語の授業は、M I Cとの連携や協力が必要であり、また、週の授業時間数が少ないため学習参観での公開が難しい。そのため、モジュール学習の参観機会を設けたり、校報やホームページでの紹介を行ったりしている。目ざす子ども像を理解し、共有していただけるための工夫を今後も重ねていく。